

比較古代都市史試論

山田邦和

はじめに

日本都市史の研究といっても、日本だけを見ていれば事が足りるわけではない。都市が通時的かつ世界的なものである限り、私たちはいつでも、日本の都市を世界史の中に位置づけるという視点を忘れてはならないのである。

しかし、日本都市史研究者の立場で既存の研究を読み進めると、そこにはいささか気落ちするような記述が散見する。いわく、日本の古代都市は、中国の都城のミニチュア・イミテーションにすぎない。いわく、都市の必要条件は大規模な都市壁（城壁）なのであり、そのような設備を持っていない日本の都市は不完全である。いわく、都市というものは食糧生産を外部に依存することが原則であるから、都市域の中に多くの農耕地を含んでいた日本の古代都市などは未成熟きわまりない。さらには、西ヨーロッパの中世都市に見るような自由な市民の自治の確立こそが都市の理想形なのであり、それに比べると日本の古代都市は権力者のキャンプにすぎず、都市という範疇にすら入らない¹⁾、などといった評価がなされているのである。日本の都市などは研究する価値すらないと決めつけられているように感じるのは、日本都市史研究者としての私だけの被害妄想なのであろうか。確かに、中国の古代都城は日本のその数倍の規模を誇っていた。また、自由都市や自治都市、都市壁といった諸要素は都市を考察するための重要な論点であることは確かであろう。しかしそれを短絡的に通時的、世界的な必要条件に拡大して、その他の都市を貶めるというのは公平な態度だとは思えないのである。

私はかつて、都市史研究において「都市の階層性」という視点が重要であることを強調した²⁾。世界の無数の都市を、単に「都市」という一句だけでひとくくりにしておいて良いわけではない。現代をとっても、ニューヨークや東京のような世界的な巨大都市と、人口数万人程度の地方の小都市を同一レベルで理解する必要はまったくない。ある都市を研究対象とする場合、私たちはその都市が世界的にどの階層に位置づけられるものかをイメージしておく必要があるのである。

ただ、世界の古代都市を比較するといっても、それにはどのような方法があるのだろうか。現代都市ならば、都市を比較するためのもっとも普遍的な指標は人口であり、それに次ぐものが経済力や産業力だということになるだろう。しかし、古代都市についてその人口を推定することは大変困難であるし、ましてや経済力や産業力となると、それらを客観的な基準で判定することはほとんど不可能事といわねばなるまい。そうすると、私たちが古代都市を比較することができる第一の指標は、都市の面積しかないであろう。もちろんどこまでの範囲を都市域とするかという問題はあるにしても、これが他の指標に比べるとはるかに公平であることは認められよう。人口や経済力についての議論も、面積による比較という前提条件が満たされた後に行われるべきであろう。

ただ、古代都市と一言でいっても、長い時間幅を持つ古代のすべてを扱うことはいささか手にあまるから、ここでは紀元後1世紀から12世紀までを対象とすることにしよう。もちろん紀元前の

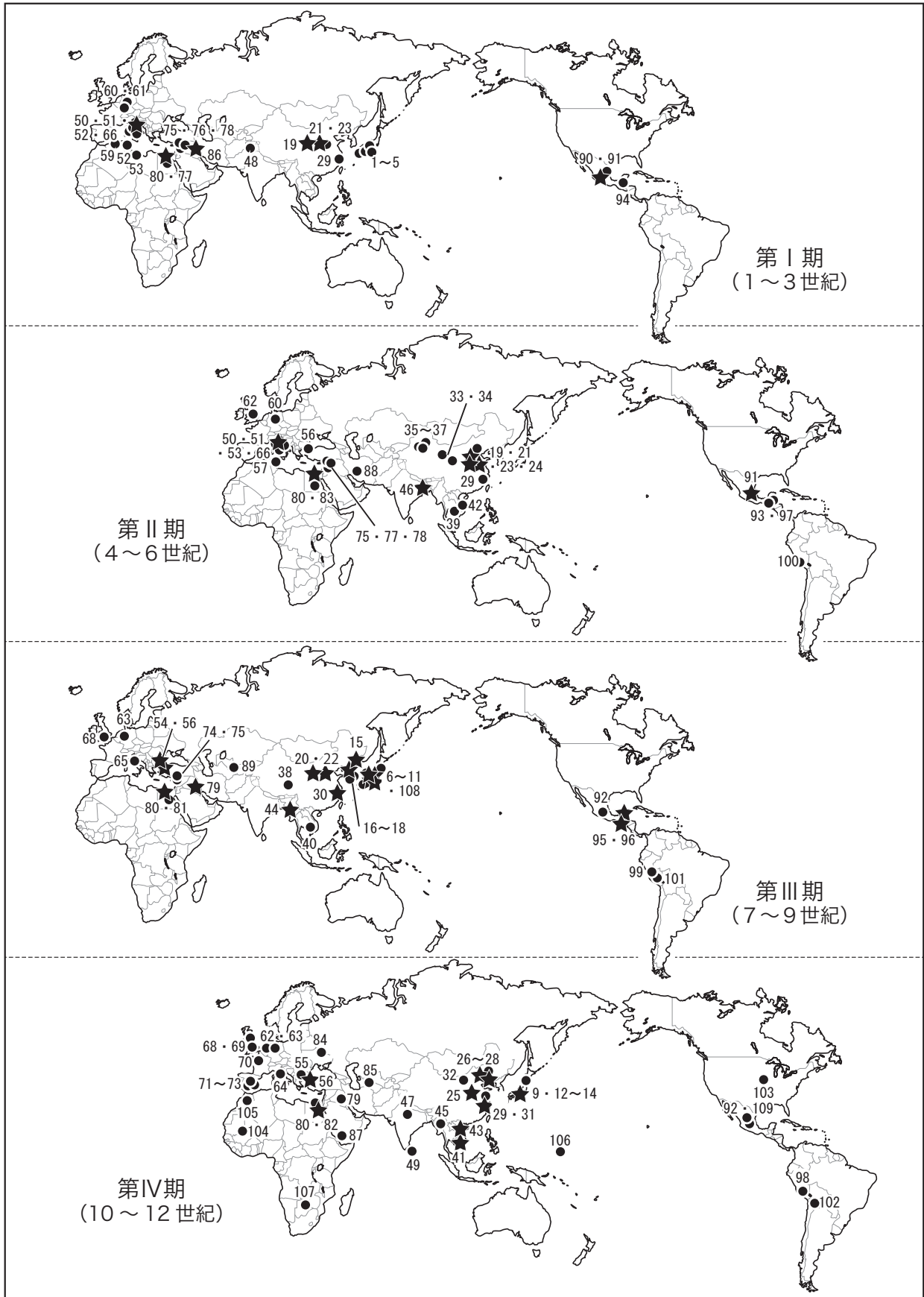


図1 世界の古代都市分布図

都市の重要性を無視するわけではない。ただ、本稿の主題のひとつは日本の古代都市の世界的な位置づけというところにあり、紀元前においては日本の都市はまったく未成熟の段階にあったから、当面の論点を紀元後に限定しておいても支障はないだろう。

もうひとつ述べておかねばならないのは、古代都市を論じるといっても、同一の時期の中で比較するか、それとも発展段階を考えるべきかという問題である。しかし、歴史の発展段階の認識はきわめて難しい課題である。たとえば、日本史のある時代が発展段階的にインド史やアフリカ史のどの時代に相当するかを問われても、私にはそれに確たる回答を与える自信はない。そこで、本稿での都市の比較にあたっては、発展段階ではなく同時代性を基準とすることにしたい。そこには発展段階としての古代に限らず、中世以降のものも入ってくるけれども、これはやむを得まい。

今、1世紀から12世紀までの世界の都市(図1、表1)を300年ごとに4時期に区分し、その各時期に第I期～第IV期という仮称を与えよう。そうした上で通観するならば、面積30km²以上を巨大都市(Sランク都市)、10km²以上30km²未満を大規模都市(Aランク都市)、5km²以上10km²未満を中規模都市(Bランク都市)、1km²以上5km²未満を小規模都市(Cランク都市)、1km²未満を極小規模都市(Dランク都市)というふうに分けておくことが至便であるように思う。

ただし、古代都市の場合、その計画範囲の全てが完全に市街地化されていたわけではない。たとえば都市壁を持つ都市であっても、壁の内側に荒蕪地や農耕地が存在することは珍しくない。そもそも、世界の諸都市の全てについて正確な市街地範囲を確定するのは困難なのである。こうした問題点は確かに存在するのであるが、細部にこだわりすぎて都市の世界史的な比較という大きな目標を忘れてはならないであろう。そこで、それぞれの都市のうち、遺構の分布や自然地形の分析によって市街地範囲を推定できるものはそれに従い、そうでないものは便宜的に都市壁の内部を対象とすることにしたい。また、公表されている都市図の縮尺に疑義があるものは、Google Earthの衛星写真から都市遺跡の状態を読み取り、それを都市図と重ねることによって縮尺の補正をおこなった。その上で、それぞれの都市図は20万分の1に縮尺を統一し、Adobe Illustratorの面積計算用プラグイン「はかりや」(コムネット[株])によって面積を算定した。

1 第I期(1～3世紀)の都市(図2、表1)

まず、第I期(1～3世紀)を採り上げよう。この時期で面積30km²を越えるような巨大都市としては、中国・前漢の首都であり後漢の時代にも重要都市として存続していた長安城(No.19、市街地面積33.2km²[以下同])が挙げられる。漢長安城で特徴的なのは、その面積の過半は複数の宮殿によって占められており、都市民の居住地には狭い面積しか割り当てられていなかったことである。次に、メソアメリカ文明古典期のテオティワカン(No.91、31.9km²)に注目しよう。テオティワカンの都市規模は径約7kmに及ぶと推定されている。紀元前の時代からかなりの規模の都市を造り続けていた中国は当然としても、第I期という早い時代に、しかもアフロ＝ユーラシア大陸から遠く離れたアメリカ大陸にこのような壮麗な都市が出現したというのは驚くべき事実だといわねばなるまい。テオティワカンは紀元前2世紀に誕生し、後1世紀に格段の発展を遂げ、さらに3世紀の内訌を乗り越え、6世紀の衰退に至るまでメソアメリカ文明の中心都市としての地位を保ち続けた。長いテオティワカンの歴史のうち、都市が最大面積に達したのがいつであったかについては不



図2 古代都市比較図(1)(第I期[1~3世紀])

確定要素が伴うけれども、この都市の主要建物群が2世紀から3世紀にかけて造営されたことを考えると、その時期にはすでに最大域に近い面積を誇っていたと考えても支障はないように思う。テオティワカンが都市壁を持っていないことも注目されるのであり、それは「都市は必ず都市壁を持つべきだ」というアフロ＝ユーラシア大陸的な常識をくつがえすものであろう。こうした大規模かつ個性的な都市がアメリカ大陸において登場することは、中国や西ヨーロッパだけしか見ない都市史研究が誤りであることを如実に示している。

なお、メソアメリカには、中規模都市や小規模都市も既に出現している。トラランカレカ(No.90、3.3km²)はテオティワカンに先行して建設されており、後者の先駆的存在として位置づけられている。エル＝ミラドール(No.94、2.9km²)はマヤ文明最初の都市のひとつであり、密林の中に高壮なピラミッド形巨大神殿群を造っている。

第I期の中国では、巨大都市に次ぐ大規模・中規模都市としては、後漢の首都である洛陽(No.21、10.3km²)、南朝(呉～陳)の首都である建康(No.29、8.4km²)、曹魏の中心都市である鄴城(No.23、

4.3 km²) などがある。曹魏の鄴城は、都市の北西部に支配者の宮殿を配した点で、後の隋唐の長安城において完成される「北闕型」都市プランの先駆形を作り出している。

ヨーロッパおよびオリエントにおける第Ⅰ期の大規模都市は、ローマ (No.50、14.4 km²)、アレクサンドリア (No.80、10.1 km²)、クテシフォン & セレウキア (No.86、10.0 km²) である。ローマはローマ帝国の首都であり、またアレクサンドリアはローマ帝国のエジプト属州の主都であった。アレクサンドリアはローマによる征服以前にはプトレマイオス朝エジプト王国 (前306～前30) の首都であり、紀元前に遡るならば世界最大級の都市のひとつだったのであろう。ローマの場合に特記されるのは、ローマから約20 km離れたテヴェレ川の河口にオスティアとミセヌムという小規模都市 (No.51、1.3 km²) が存在しており、ローマとの間がオスティエンテ街道によって結ばれていたことである。オスティアとミセヌムはローマの外港という性格を持っており、ローマの「衛星都市」として評価できよう。また、クテシフォン & セレウキアはパルティア帝国やサーサン朝ペルシアの首都であり、チグリス川を挟んで二つの都市が隣り合う双子都市であった。

ローマ世界の中規模・小規模都市としては、カルタゴ (No.57、7.2 km²)、アンティオキア (No.78、6.0 km²)、さらにはアグスタ＝トレウェロルム (No.61、2.5 km²)、コロニア＝アグリッピネンシス (No.60、2.3 km²)、メディオラーヌム (No.66、1.2 km²)、パルミュラ (No.76、1.2 km²)、ダマスカス (No.75、1.1 km²) などが存在していたが、これらはほとんどがローマ帝国の属州の主都またはそれに準ずる中心都市であった。コロニア＝アグリッピネンシスは、3世紀後半にローマ帝国本体からの分離を果たした、通称「ガリア帝国」の首都にもなった。しかし、政治的には自立したものの、コロニア＝アグリッピネンシスの都市規模はローマにはまったくおよばなかった。

第Ⅰ期の日本列島は弥生時代中期・後期から古墳時代の初頭にほぼ該当する。特徴的なのは、福岡県の比恵・那珂遺跡群 (No.1、1.4 km²)、奈良県の唐古＝鍵遺跡 (No.2、0.3 km²)、大阪府の池上＝曾根遺跡 (No.4、0.1 km²)、佐賀県の吉野ヶ里遺跡 (No.3、0.4 km²) のような、環濠を巡らした大集落が営まれることである。また、弥生時代末期から古墳時代前期初頭 (3世紀) に下る奈良県纏向遺跡 (No.5、0.9 km²) になると、環濠といった明確な境域を持たず、山麓の扇状地の広い範囲に中心的建物群、居住地、生産地、巨大モニュメント (古墳) などを散在させている。これらはそれぞれの大地域の中心として「拠点集落」と呼ばれており、比恵・那珂遺跡群などは「日本列島最古の都市」と評価する意見もある³⁾。中国の歴史書である『漢書』『後漢書』『三国志〔魏書〕』には、この時代の日本列島に多くの「国」があったと記されており、この「国」の実態はこうした拠点集落であったと考えられている。それらを「巨大な農村」とみるかそれとも「弥生都市」と評価するかは学界でも意見が分かれている⁴⁾ のであるが、これらの遺跡がもつ地域の中心的機能を積極的に評価するならば、それらを都市と考えてもまったく支障はないと思う。しかし、面積から見ると、比恵・那珂遺跡群が小規模都市、唐古＝鍵遺跡や池上＝曾根遺跡や吉野ヶ里遺跡は極小規模都市ということになる。つまり、第Ⅱ期の日本列島では、都市はまだまだ未発達段階にいたのである。角田文衛は、最初の集落を「村邑 (Village)」とし、それに続く都市の第1段階を「町邑 (Town)」、第2段階を「都邑 (City)」と区分した⁵⁾。その考えに立つならば、日本の「弥生都市」はいずれも「町邑」として評価が可能であると思う。

2 第Ⅱ期（4～6世紀）の都市（図3、表1）

次に第Ⅱ期を見よう。この時期で注目されるのは、巨大都市の中でもさらに大規模な、総面積60 km²を越す都市が登場していることである。それはいずれも中国の南北朝時代の北朝においてのことであり、東魏・北周の首都である鄴城（No.23、67.3 km²）と、北魏の洛陽（漢魏洛陽城）（No.21、62.1 km²）であった。鄴城は第Ⅰ期の魏（三国時代の曹魏）の首都として始まった段階では中規模都市であったが、南北朝時代の東魏の首都として引き継がれるや、従来の曹魏の鄴城を「鄴北城」とした上でその南側に「鄴南城」を造営し、さらにはその周囲に広大な「外郭城」を付け加えることによって総面積67.3 km²に及ぶ巨大都市としたのであった。また、北魏の洛陽においても、その前身である後漢の洛陽の外側に「外郭城」を営み、巨大都市を作り上げている。それらに比べると南朝の首都の建康（No.29、8.4 km²）は中規模都市にとどまっていたらしい。

大規模都市としては、インドのパータリプトラ（No.46、23.2 km²）、ローマ帝国のローマ（No.50、14.4 km²）とアレクサンドリア（No.80、10.1 km²）などが挙げられよう。パータリプトラは前5世紀のマガダ国の時代の首都であり、続くマウリヤ朝ではインド世界最大の都市に成長した。その正確な規模はよくわからないけれども、20 km²を超えていたことは確実であろう。

その他、東南アジアではカンボジアの扶南国において、6世紀にアンコール・ボレイ（No.39、2.5 km²）が建設されたのであるが、これはまだ小規模都市であった。

ローマ帝国では、4世紀以降になると帝国の中心が東地中海地域に遷るとともに、それまでの首都であったローマが衰退し、ローマ帝国西方領土（いわゆる「西ローマ帝国」）の政治的中心はラヴェンナ（No.53、1.3 km²）となり、その他の主要都市としてはメディオラーヌム（No.66、1.2 km²）などが存在するだけになる。しかし、ラヴェンナやメディオラーヌムは面積的には小規模都市にすぎなかった。西方領土の衰微の一方、4世紀のローマ帝国が東方領土の中心とするべく建設した都市がコンスタンティノポリスである。建設当初（4世紀）のコンスタンティノポリス（No.56、7.4 km²）は中規模都市であったのであるが、5世紀のテオドシウス2世カリグラフォス（在位401～450）の時代に大拡張を遂げ、面積14.6 km²の大規模都市に発展する。その他、ローマ世界では、属州アフリカのカルタゴ（No.57、7.2 km²）、属州シリアのアンティオキア（No.78、6.0 km²）、属州ガリアのコロニア＝アグリッピネンシス（No.60、2.3 km²）、属州シリアのダマスカス（No.75、1.1 km²）などの属州の主都が中規模都市または小規模都市となっていた。

アメリカ大陸では、メソアメリカ文明圏においては引き続きテオティワカン（No.91）が巨大都市として君臨し、その影響のもとにカミナルフユ（No.93、2.7 km²）やパレンケ（No.97、1.4 km²）といったマヤの小規模都市が続々と誕生していく。また、南アメリカ大陸においても、アンデス文明のナスカ文化のカワチ（No.100、1.8 km²）といった小規模都市が登場する。

第Ⅲ期は、日本列島では古墳時代に該当する。この時代の倭には小規模都市ですら存在せず、いわば都市の空白期であったといえよう。古墳時代の倭の大王の王宮は、大王が替わるごとに移動しており、これを「歴代遷宮」と呼んでいる。大王宮は、近畿地方中央部の広い範囲の中で転々と移動しており、目立った都市を形成していなかったようである⁶⁾。また、大王以外の王族や諸豪族はそれぞれの拠点に独自の宮や居館を持っていたようであり、それらは必ずしも大王宮に近接してはいなかったらしい。すなわち、大王宮、王族の宮や豪族居館、モニュメントがひとつの場所に集約

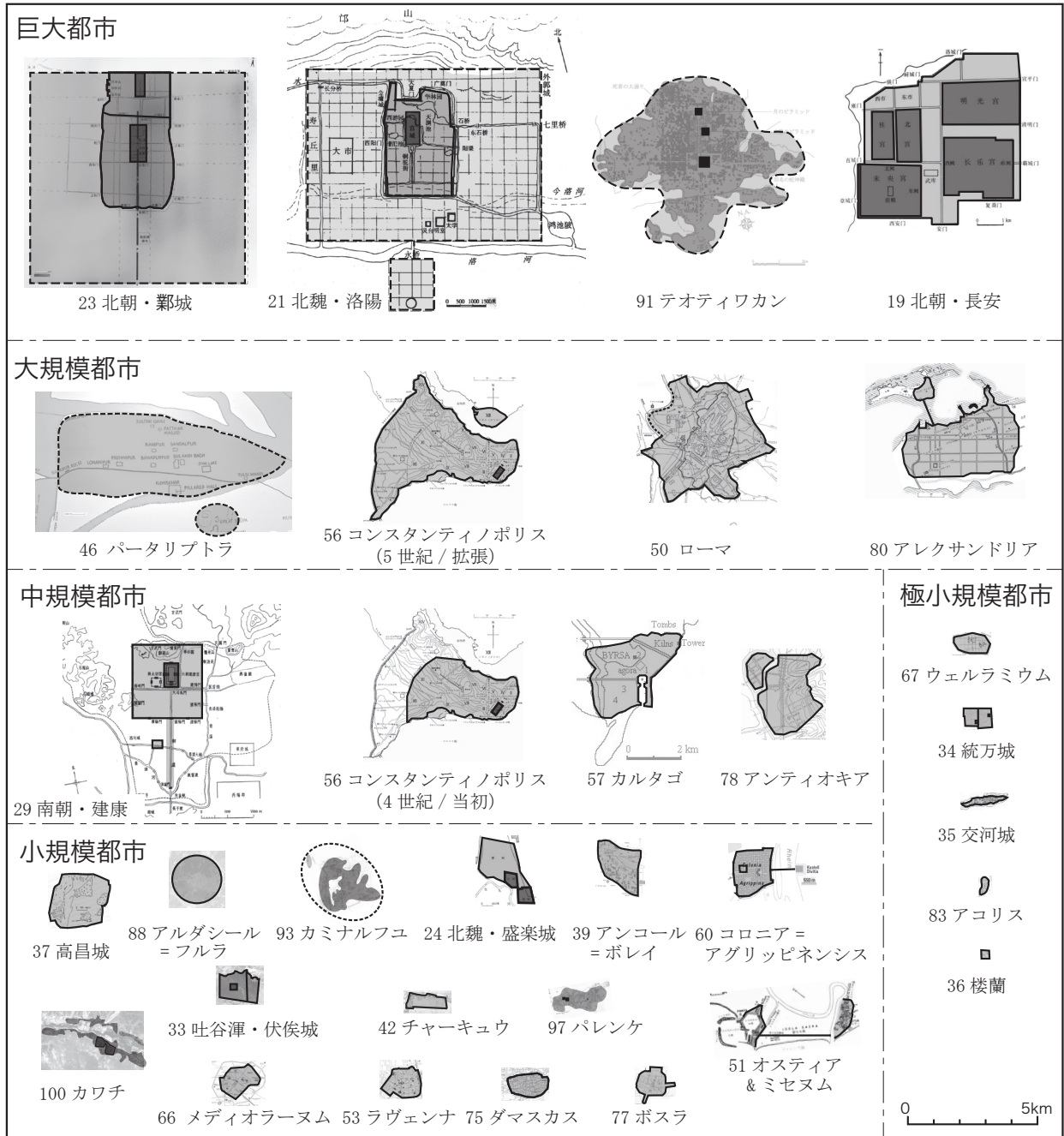


図3 古代都市比較図(2) (第Ⅱ期 [4~6世紀])

されて「都市」となる段階にはいたっていなかったのである。

3 第Ⅲ期 (7~9世紀) の都市 (図4、表1)

第Ⅲ期で重要なのは、古代世界における最大の都市として、隋・唐王朝の首都である長安 (No.20、75.6 km²) が登場したことである。唐の長安は東西・南北の直線道路によって整然と区画された計画都市であり、都市の計画面積は 87.3 km²、その中で実際に市街地となった面積は 75.6 km²であると推定される。唐には、長安に次ぐ巨大都市として副都である洛陽 (No.22、43.5 km²) があつた。

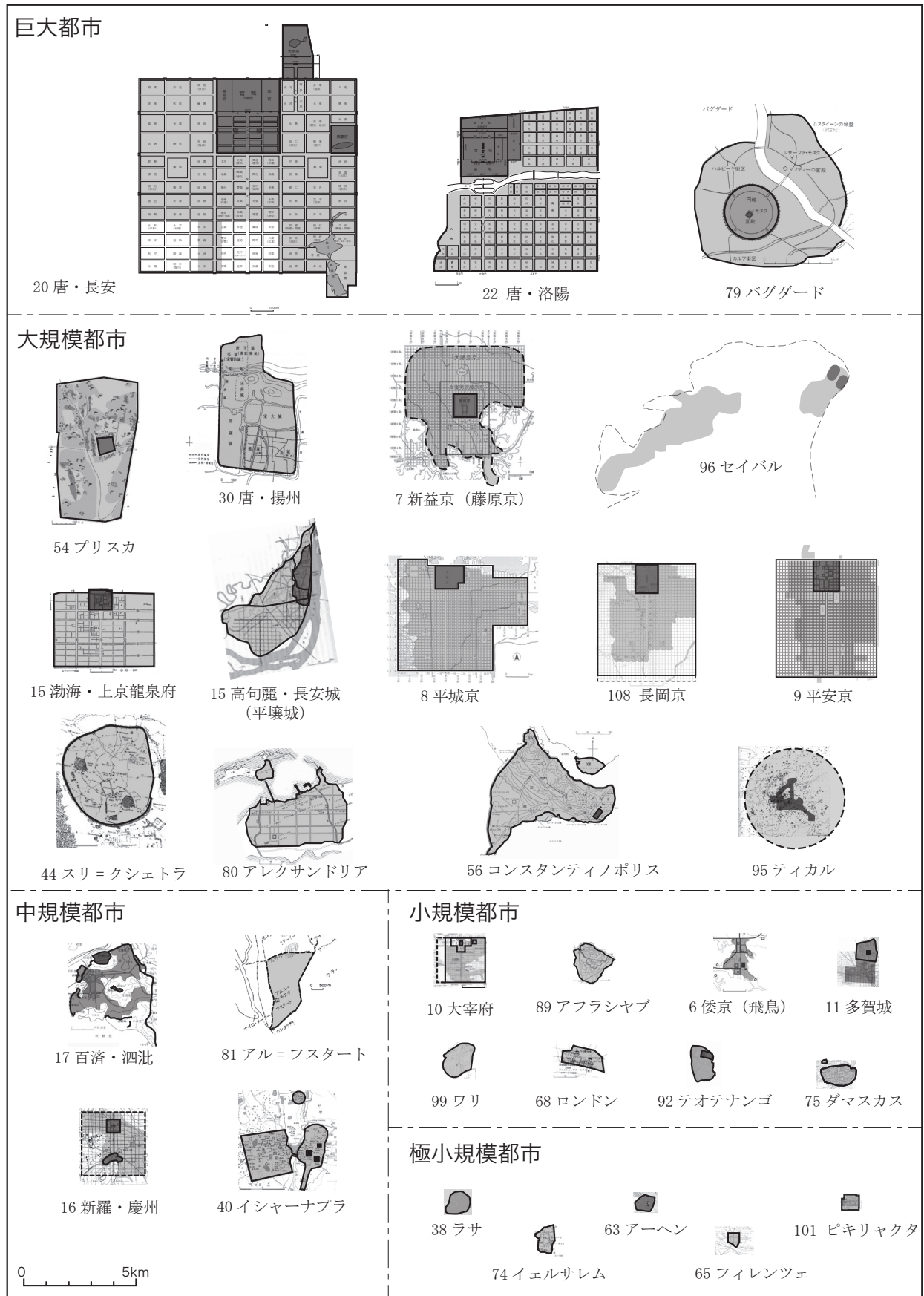


図4 古代都市比較図(3) (第Ⅲ期 [7~9世紀])

また、イスラーム世界における巨大都市としてバグダード (No.79、32.3 km²) が築かれている。バグダードは都心部を正円形に設計し、その周囲に市民の居住域が取り巻くというユニークな構造を持つ計画都市だった。

メソアメリカでは、6世紀になるとテオティワカンが突如として破壊される。テオティワカンが完全に廃墟化してしまったというわけではないのであるが、少なくとも巨大都市としての繁栄は終わってしまった。その後のメソアメリカ文明では、16世紀にメシカ王国 (アステカ王国) の首都として拡大したテノチティトラン (15.0 km²) ですら、最盛期のテオティワカンの規模にはまったく及ばなかった。テオティワカン衰退後には、メキシコ中央高原地域ではテオテナンゴ (No.92、1.3 km²) のような小規模ではあるが堅固な防御施設を整えた要塞都市の時代となる。また、トゥーラ (トゥーラ・ヒココティトラン、No.109) が「トゥーラ・チコ」と呼ばれる地区において建設が始まるのであるが、第Ⅲ期にはこれはまだ小さく、その拡大は第Ⅳ期をまたねばならなかった。

メソアメリカ文明の地方文明であるマヤ文明では、最大の都市としてティカル (No.95、15.6 km²) が発展する。ティカルやセイバル (No.96、11.8 km²) では、都市中央部をピラミッド形神殿が林立する「エリート・センター (祭祀センター)」とし、周辺のジャングルの中の広大な範囲に集落が点在し、全体としてひとつの都市を構成するというユニークな構造を持っている⁷⁾。マヤの都市の実態は、世界には「人口が集中しない都市」もあったのだということを私たちに教えてくれている。

南アメリカ大陸に目を移すと、アンデス文明では地方の分化が著しい時代と、「ホライズン」と呼ばれる広域文化圏が成立する時代が交互に入れ替わることが特徴であるが、6世紀から10世紀頃には「中期ホライズン」という広域文化圏 (通称「ワリ帝国」) が成立し、その中心都市としてワリ (No.99、1.5 km²) が登場する。ただし、ワリの1.5 km² というのは神殿群が密集する中核部だけであり、その周辺までも含めると都市域は15.0 km² にも及ぶという推定もなされている。それが正しいとすると、ワリもまた大規模都市として評価し直す必要があるだろう。

ヨーロッパ世界では、中世ローマ帝国 (いわゆる「東ローマ帝国」)⁸⁾ の首都としてのコンスタンティノポリス (No.56、14.6 km²) が、「都市の女王」の異名にふさわしく、大規模都市としての存在感を發揮し続けている。一方、東ヨーロッパにおいて中世ローマ帝国の政治的権威に挑戦した国が第1次ブルガリア帝国である。その首都であるプリスカ (No.54、20.3 km²) がコンスタンティノポリスに比肩または凌駕する大規模都市に発展していたことは注目しておかねばなるまい。この時期の西ヨーロッパではカロリング朝フランク王国がカール大帝 (在位768～814) のもとで領域を拡大し、広大な帝国を築きつつあったのであるが、その首都アーヘン (No.63、0.5 km²) は面積的には極小規模都市にすぎなかったし⁹⁾、そもそもカールを始めとするフランク国王はひとつの首都に定住することすらできず、王国の各地を移動するのを常としていた。確かにフランク王国は広大な版図を誇ったのであるが、都市の発展という視点で見ると中世ローマ帝国やブルガリア帝国に比べてはるかに遅れていたといわざるをえない。第Ⅲ期のヨーロッパ世界では、都市文明の中心は明らかに東ヨーロッパにあったのである。なお、ローマ文明から放逐された西ヨーロッパでは、それまでの都市はほとんどが衰退してしまう。そして、イングランドのロンドン (No.68、1.3 km²) やイタリアのフィレンツェ (No.65、0.3 km²) が小規模都市または極小規模都市から新たな歩み始めることになる。

第Ⅲ期に入って、日本列島でもようやく本格的な都市が登場することになる。6世紀末から7世

紀中葉にかけて、倭政権の首都としての倭京つまり飛鳥 (No.6、1.5 km²) が整備されていく。これは都市プランが不整形であり、まだまだ小規模都市に過ぎなかった。しかし、飛鳥がそれまでの日本の都市と異なっていたのは、寺院や宮殿が計画的に配置されていたことである。さらに、7世紀後半には日本列島で初めての大規模都市である新益京 (藤原京) (No.7、20.8 km²) が造営され、ここに「都市の時代」が開幕する。その後、日本の古代都城は8世紀初頭の平城京 (No.8、20.1 km²)、8世紀末の長岡京 (No.108、12.2 km²) や平安京 (No.9、18.8 km²) へと引き継がれる。平安京は東西約4.5km、南北約5.2km、総面積23.4 km²の都市として設計されていた。平城京、長岡京、平安京は中国の唐の長安城のミニチュア・コピーであったことは確かであるが、それまで都市が未発達であった日本において、急激に大規模都市が登場したことの意義は小さくない。

朝鮮半島およびその周辺では、渤海の首都である上京龍泉府 (No.15、14.7 km²) と三国時代の高句麗の首都長安城 (平壤城) (No.18、10.4 km²) が大規模都市、百済の泗泚 (No.17、5.5 km²) と新羅の慶州 (No.16、5.2 km²) は中規模都市と評価できるであろう。

4 第Ⅳ期 (10～12世紀) の都市 (図5、表1)

最後に、第Ⅳ期を見よう。この時期にあって特徴的なのは、中国の巨大都市である南宋の臨安 (No.31、51.4 km²) や北宋の開封 (No.25、46.5 km²) が他の地域の都市を圧していることに加えて、カンボジアのクメール朝の首都アンコール (No.41、68.6 km²) が整然とした巨大都市を築き上げたことである。アンコールは中央大寺院としてのアンコール・ワットと、王宮としてのアンコール・トムのみふたつの施設を中核としつつ、中心市街地だけでも68.6 km²という広大な面積を誇る計画都市であった。さらに、アンコールの周囲には大規模な郊外都市圏が成立していたらしい。

大規模都市としては、金の中都 (No.26、26.6 km²)、日本の京都 (後期平安京。No.9、25.2 km²)、エジプトのアッバース朝のアル＝フスタートとカーヒラの複合都市 (No.82、24.8 km²)、ヴェトナムのタンロン (No.43、14.9 km²)、中世ローマ帝国のコンスタンティノポリス (No.56、14.6 km²)、遼の中京大定府 (No.28、14.5 km²)、南唐の江寧府 (No.29、14.5 km²)、セルジューク朝のメルヴ (No.85、10.8 km²) といった都市を挙げることができよう。ヨーロッパ世界では引き続いてコンスタンティノポリスが圧倒的な規模を誇ってはいたけれども、12世紀以降にはセルジューク朝の圧迫によって中世ローマ帝国自体が衰退し始め、コンスタンティノポリスも次第にその広大な都市域を持て余すようになってしまう。第Ⅲ期に大規模都市となった第1次ブルガリア帝国の首都プリスカ (No.54) は、9世紀前半には中世ローマ帝国の侵攻による荒廃、さらに9世紀末のプレスラフへの遷都によって衰退する。代わって登場するプレスラフ (No.55、2.4 km²) は、プリスカにはまったく及ばない小規模都市になってしまっていた。

第Ⅳ期でもうひとつ注目されることは、12世紀にはいって、世界各地で小規模都市や極小都市が勃興することであろう。中でも、西ヨーロッパにおけるそれら諸都市の発展にはめざましいものがあった。特に目立つのは、カペー朝フランスのパリ (No.70、2.2 km²)、イングランドのロンドン (No.68、1.5 km²) やヨーク (No.69、1.0 km²)、ブラバント公国のブリュッセル (No.62、0.9 km²)、イタリアのジェノヴァ (No.64、0.5 km²) などであり、これらの諸都市は12世紀にはまだまだ小規模だったけれども、13世紀以降には格段の発展を遂げることになるのである。

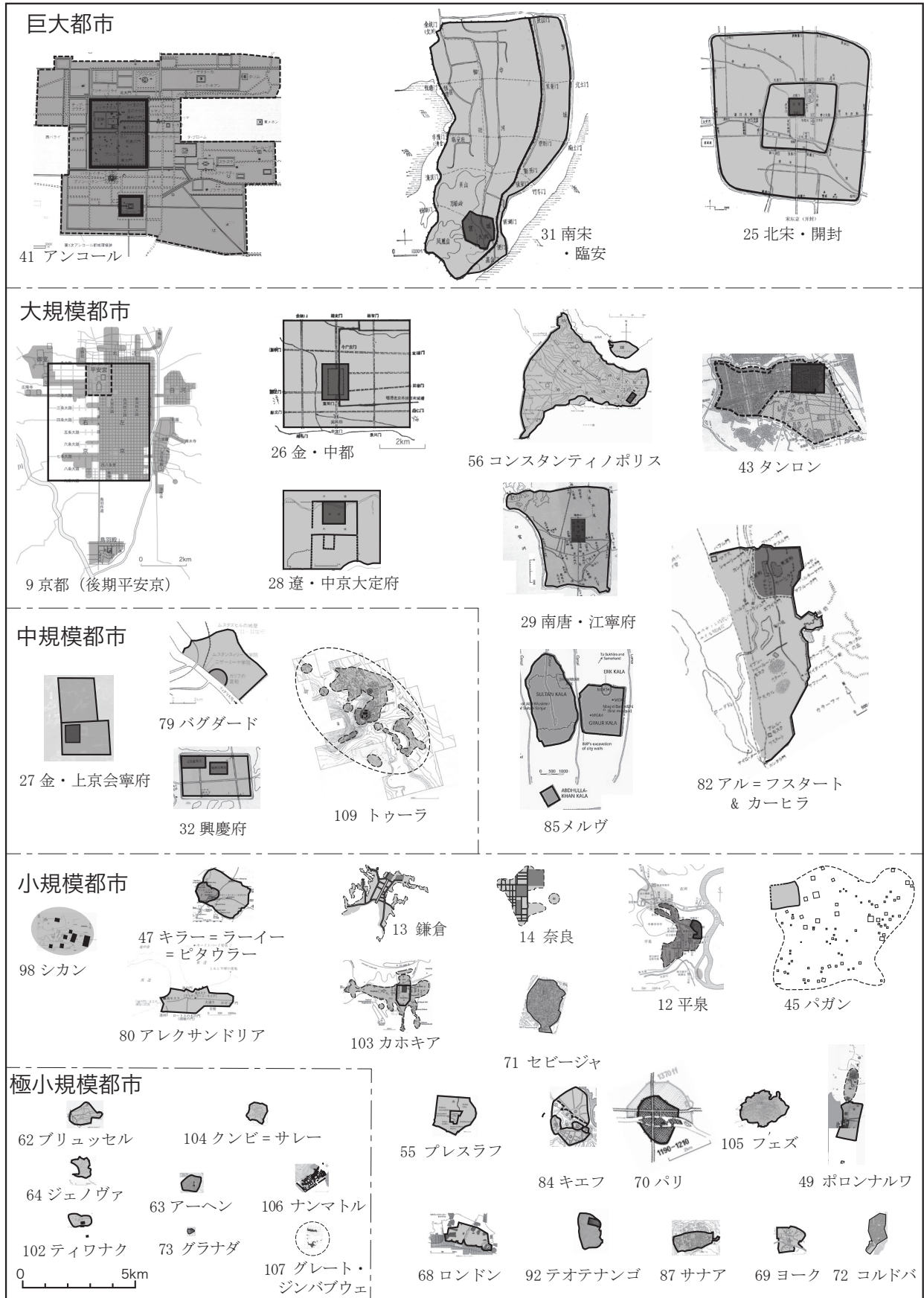


図5 古代都市比較図(4) (第IV期 [10~12世紀])

イスラーム教世界では、アル＝フスタートとカーヒラの複合都市 (No.82、24.8 km²) やメルヴ (No.85、10.8 km²) といった大規模都市に続いて、アッバース朝のバクダード (No.79、5.7 km²)、ムラービト朝のセビージャ (No.71、2.7 km²)、ファーティマ朝に始まるフェズ (No.105、2.3 km²)、オスマン帝国のサナア (No.87、1.2 km²)、後ウマイヤ朝のコルドバ (No.72、1.0 km²) などといった中小規模の諸都市がそれぞれの王朝の中心都市としての存在感を放つようになる。サナアはアラビア半島西南部に所在し、面積的には小規模都市だったけれども、市街地にぎっしりと高層建築物が立ち並ぶ「超過密都市」であった。なお、第Ⅲ期までは大規模都市だったアレクサンドリアは第Ⅳ期にはいると縮小し、小規模都市となってしまった (No.80、2.5 km²)。

アフリカ大陸中部・南部にはそれまで明確な都市は存在しなかったが、第Ⅳ期にガーナ王国の首都クンビ＝サレー (No.104、0.6 km²) が登場する。この都市はアフリカ大陸中部・南部における都市の先駆的存在として評価できよう。なお、クンビ＝サレーは現状では極小都市であるが、隣接地域にも遺跡が眠っている可能性があり、全体の都市域はさらに広いものになるかもしれない。また、同大陸南部ではジンバブウェ王国のグレート・ジンバブウェ (No.107、0.1 km²) が勃興する。この都市の最盛期はもう少し後の時代だったらしいが、第Ⅳ期の後半に誕生していたことは確かであろう。

また、南太平洋の諸島の中では、ミクロネシアのポンペイ島 (ポナペ島) のシャウテレウル王朝が11世紀から16世紀にかけてナンマトル (ナン・マドール) (No.106、0.2 km²) を建設していった。これは海岸沿いに石材を積み上げた百以上の人口島を建造し、そのそれぞれに首長の宮殿、神殿、宗教施設、邸宅などを載せるという、世界に類をみない特異な都市であった。

日本では、小規模都市としては大和国の奈良 (No.14、3.1 km²) や奥州の平泉 (No.12、2.6 km²) が存在感を放ち、さらにこの時代の末期には相模国の鎌倉 (No.13、3.2 km²) が誕生した。奈良は第Ⅲ期の平城京が廃都となりながらも、一部が興福寺や東大寺といった大規模寺院の境内都市として生き残ったものである。11世紀末の奥州に自立した政権を樹立したのが「奥州藤原氏」であり、彼らは自らの中枢都市として平泉を建設した。平泉は小規模都市であったけれども、奥州藤原氏が京都の文化を導入したことにより、中尊寺金色堂に代表される絢爛豪華な文化が開花することになった。もし奥州藤原氏の権力が永続したならば、平泉もさらに発展したことであろう。しかし、12世紀末に奥州藤原氏は鎌倉幕府の源頼朝によって滅ぼされてしまい、それによって平泉の都市的発展は停止することになる。鎌倉は、12世紀末の治承・文治の内乱の最終的な勝者となった源頼朝が武家政権としての幕府の本拠として創り上げた都市であった。ただし、日本ではやはり首座都市である京都 (No.9、25.2 km²) が圧倒的であり、その規模は第2位都市の8倍から10倍に達していた。

メソアメリカでは、第Ⅲ期に引き続いて堅固な防御施設を持つ無数の都市が興隆することになる。テオテナンゴ (No.92、1.3 km²) のような小規模都市はその典型的な事例であろう。トゥーラ (トゥーラ・ヒココティラン) (No.109、5.8 km²) は、第Ⅲ期に「トゥーラ・チコ」という小規模都市として成立するが、第Ⅳ期にはいってやや東南方の「トゥーラ・グランデ」地区に「遷都」したことによって飛躍的に発展し、メソアメリカ文明の中心都市のひとつに成長していく。トゥーラは現状での遺構の分布域は面積5.8 km²ほどであったと試算でき、とりあえずは中規模都市としておきたいのであるが、実際の都市の範囲はさらに広がって面積13 km²にも及んだのではないかという推

定もなされており、その場合には大規模都市として評価し直さなければなるまい。なお、「トゥーラ」とは実は固有名詞ではなく、「都市」を意味する普通名詞であった。この時期のメソアメリカは「後古典期」または「トルテカ時代」と呼ばれているのであるが、この場合の「トルテカ」とは単純な民族名ではなく、「都市（トゥーラ）の民」、つまりあふれる知識を持った文化人として社会の尊敬を集めていた人々のことであった¹⁰⁾。すなわちメソアメリカでは、「都市」とは単なる非農業的な大集落だったのではない。知恵があり、高い文化を持ち、情報を自在に操ることができる人々の集合体こそが「都市」であると認識されていたのである。

その他、第Ⅳ期の小規模都市や極小規模都市としては、東南アジアのパガン朝ビルマのパガン(No.45、1.3 km²)、アンデスのシカン(No.98、4.4 km²)、などを挙げることができよう。パガンは市街地は狭いけれども、その郊外の広大な範囲に無数の寺院群を点在させるという特異な都市景観を生み出している。

5 古代都市の人口についての試案

次の課題は、これらの都市の人口である。これまでも古代都市の人口を推定する試みはおこなわれてきたが、その多くは過大にすぎるといわざるをえない。たとえば、「古代ローマの人口は百万人」とか、「平泉は人口14万人であり、京都に比肩する大都市」といった言説が聞かれることがある。これが事実だとすると、古代ローマの都市壁内部の面積は14.4 km²であるから、人口密度は7万人/km²にのぼることになる。また、平泉の都市面積は2.6 km²ほどであると推定できるから、これも人口密度は5万人/km²を超えることになる。しかし、現代の超過密都市として著名なモルディブのマレは人口密度8万人/km²、インドのダッカとムンバイがそれぞれ6万人/km²と3.2万人/km²、フィリピンのマニラが4.6万人/km²、中国の香港の中心市街地（香港島北部および九龍地区）が3.4万人/km²である。現代の京都市の中心部（上京区・中京区・下京区）では人口密度は1.3万人/km²である。また、現代都市のひとつの示標となっている「人口集中地区（DID〔Densely Inhabited District〕）」の定義では、人口密度0.4万人/km²以上という数値が基準とされている。現代都市ですらそうなのであるから、古代都市の人口の過大な算定を無批判に受け入れることは困難であろう。古代都市の人口論は、都市域面積をふまえた上でのバランスのとれた推定でなければならないと思う。

そうはいつても、古代都市の人口密度の推定は容易ではない。ただ、現代都市との比較からみるならば、古代都市で人口密度1万数千人/km²を超える状況を考えてしまうのは絵空事になるだろうと感じている。一方、低密度都市というユニークな構造を持つマヤ文明のティカルの場合、15.6 km²に1万人強が住んでいたという推定がなされており、この場合には人口密度は約700人/km²となる。ひとまずこれを、古代都市の人口密度の下限と仮定しておこう。

日本の弥生時代では、紀元前1世紀頃の環濠集落である神奈川県横浜市大塚遺跡（大塚・歳勝土遺跡の居住区）において人口が試算されている¹¹⁾。それによると、この遺跡では0.019 km²の環濠内に、一時期に20～30軒の住居が存在しており、1軒に5人が居住したとすると一時期の人口は100～150人程度であったとされている。この場合、人口密度は約5千人/km²ということになる。

日本の古代都城の場合、井上満郎は成立期平安京の人口を12万人～13万人と見積もっている¹²⁾。

この場合、人口密度は5千人～5千500人/km²ほどになる。ただ、この案は平安京の計画範囲である23.4km²のほぼ全域が宅地化されたと仮定して算出されており、実際にはまだまだ京の計画範囲内には未開発の土地が残されていたであろう。それを割り引くと都市面積は18.8km²程度だったと考えたい¹³⁾。これに井上案の人口密度を掛けるならば10万人前後という数字がでる。これを平安時代前期の平安京の人口の目安と考えておいても大きな誤りはないであろう。

ごく大雑把な仮説としては、古代都市の人口密度の上限を1万人/km²前後と考え、これを「高密度都市」と呼ぼう。そうすると、数千人/km²を「中密度都市」、千人未満を「低密度都市」とすることができよう。いささか大胆ではあるが、この仮説に基づいて古代都市の人口のイメージを考えてみよう（以下、高密度都市、中密度都市、低密度都市をそれぞれ〔高〕〔中〕〔低〕と略記）。1世紀から12世紀において、圧倒的な人口規模を誇っていたのは唐の長安（第Ⅲ期〔高〕）、クメール朝のアンコール（第Ⅳ期〔高〕）、南宋の臨安（第Ⅳ期〔高〕）、北宋の開封（第Ⅳ期〔高〕）、唐の洛陽（第Ⅲ期〔高〕）だったと思う。これらはいずれも40万人の居住者がいたと推定できるし、唐長安やアンコールにいたっては60万人もしくはそれ以上という大量の人口を抱えていたとしてもおかしくない。続いて、20万人以上40万人未満程度と考えるのは、北朝の鄴城（第Ⅱ期〔中〕）、後漢の長安（第Ⅰ期〔高〕）、アッバース朝のバグダード（第Ⅲ期〔高〕）、北魏の洛陽（漢魏洛陽城）（第Ⅱ期〔中〕）、金の中都（第Ⅳ期〔高〕）、エジプトのアル＝フスタート＆カーヒラ（第Ⅳ期〔高〕）などの諸都市であろう。それらに続くのが、北朝の長安（第Ⅱ期〔中〕）、テオティワカン（第Ⅰ・Ⅱ期〔中〕）、コンスタンティノポリス（第Ⅲ・Ⅳ期〔高〕）、遼の中京大定府（第Ⅳ期〔高〕）、ローマ（第Ⅰ・Ⅱ期〔高〕）、平安京（第Ⅲ・Ⅳ期〔中〕）、パータリプトラ（第Ⅱ期〔中〕）、プリスカ（第Ⅲ期〔中〕）、アレクサンドリア（第Ⅰ～Ⅲ期〔高〕）、平城京（第Ⅲ期〔中〕）といった都市であり、これらは10万人以上20万人未満であったと推定したい。この中で、第Ⅳ期の平安京（京都）は25.2km²またはそれ以上の範囲に広がる大規模都市であった¹⁴⁾が、人口密度の点では中密度都市であったと考える。いま、その時期の平安京＝京都の人口密度を5千人～6千人/km²と仮定するならば、その総人口は12万人から15万人程度と推定できよう。古代世界において、人口10万人を超える都市はやはり隔絶した巨大規模だったのであり、これらは「世界的大都市」と呼ぶことができるであろう。

日本列島においては、古代都市の出現は確かに遅れた。第Ⅰ期の日本の都市は極めて小規模であったし、第Ⅱ期には日本に都市があったかどうかはわからなくなってしまう。しかし、第Ⅲ期から第Ⅳ期にかけて、日本の都市は飛躍的な発展を遂げた。中でも、日本古代都城の最終結論ともいうべき平安京は、面積的には大規模都市、さらに人口を勘案しても世界的大都市のひとつとして十分に評価が可能なのである。

註

- 1) マルクス主義史学の立場からこうした論点を強調したものとして、たとえば、鬼頭清明『日本古代都市論序説』（法政大学出版局、1977年）がある。
- 2) 山田邦和「中世京都都市史研究の課題」（山田『京都都市史の研究』、吉川弘文館、2009年）。
- 3) 久住猛男「列島最古の『都市』—福岡市比恵・那珂遺跡群—」（『総括シンポジウム「古墳時代における都市化の実証的比較研究—大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地—」資料集、大阪歴史博物館・大阪市博物館協会大阪文化財研究所、2018年）。
- 4) 「弥生都市」を認める立場としては広瀬和雄「弥生都市の成立」（『考古学研究』第45巻第3号、考古学研究会、1998年）、同『前方後円墳国家』（角川書店、2003年）、久住猛男「列島最古の『都市』—福岡市比恵・那珂

- 遺跡群一」(註3前掲論文)など。認めない立場としては都出比呂志「都市の形成と戦争」(『考古学研究』第44巻第2号、考古学研究会、1997年)、秋山浩三『弥生実年代と都市論のゆくえ—池上曾根遺跡—』(新泉社、2006年)など。
- 5) 角田文衛『古代学序説』(山川出版社、1954年〔増補版1972年〕)。
 - 6) 山田邦和「山陵と京郊の葬地」(『講座 畿内の古代学 第3巻「王宮と王都」』、雄山閣、2020年)。寺前直人「都市なき古墳時代社会の権力構造—政祭葬三形態の分立システム—」(渡部森哉・村上達也編『人類学研究所研究論集 第14号「古代都市研究の最前線」』、南山大学人類学研究所、2025年)。
 - 7) マイケル・D・コウ(加藤泰建・長谷川悦夫訳)『古代マヤ文明』(創元社、2003年)。ジェレミー・A・サブローフ(青山和夫訳)『新しい考古学と古代マヤ文明』(新評論、1998年)。
 - 8) いわゆる「東ローマ帝国」を「中世ローマ帝国」と呼ぶことについては、角田文衛「中世ローマ帝国緒論」(角田『古代学の展開』、山川出版社、2005年)、参照。
 - 9) 角田文衛「アーヘンで思ったこと」(角田『京の夕映え』、東京堂出版、1993年)。
 - 10) 大井邦明『消された歴史を掘る—メキシコ古代史の再構成—』(平凡社、1985年)。
 - 11) 安藤広道「弥生時代水田の立地と面積—横浜市鶴見川・早淵川流域の弥生時代中期集落群からの試算—」(『史学』第62巻第1・2合併号、三田史学会、1992年)。
 - 12) 井上満郎『平安京の人口について』(『京都市歴史資料館紀要』第10号、京都市歴史資料館、1991年)。
 - 13) 山田邦和「前期平安京の復元」(山田『京都都市史の研究』、註2前掲書)。
 - 14) 山田邦和「平安京の都市構造変遷」(『都市史研究』第2号、都市史学会、2015年)。

(同志社女子大学現代社会学部特任教授)

表1 古代都市比較表

面積 ランク	番号	国家・文明	都市名 (() 内は現代地名)	現代の国家	概略の時期	面積 (km ²)	
第Ⅰ期 (1～3世紀)							
巨大都市	19	後漢	長安 (漢長安城)	中国	前1～後1世紀	33.2	
	91	メソアメリカ古典期	テオティワカン	メキシコ	2～6世紀	31.9	
大規模都市	50	ローマ帝国	ローマ	イタリア	1～4世紀	14.4	
	21	後漢	洛陽 (漢魏洛陽)	中国	1～3世紀	10.3	
	80	ローマ帝国属州エジプト	アレクサンドリア	エジプト	前4～後7世紀	10.1	
	86	バルティア、ササン朝ペルシア	クテシフォン & セレウキア	イラク	前2～後2世紀	10.0	
中規模都市	29	南朝 (呉～陳)	建康 [南京]	中国	3～6世紀	8.4	
	57	ローマ帝国属州アフリカ	カルタゴ	チュニジア	前1～後6世紀	7.2	
	78	ローマ帝国属州シリア	アンティオキア [アンテキア]	トルコ	1～6世紀	6.0	
小規模都市	23	後漢～曹魏	鄴城	中国	3世紀	4.3	
	90	メソアメリカ形成期	トラランカレカ	メキシコ	～2世紀	3.3	
	94	メソアメリカ マヤ先古典期	エル＝ミラドル	グアテマラ	前3～後2世紀	2.9	
	61	ローマ帝国属州ガリア	アグスタ＝トレウェロルム [トリアー]	ドイツ	3～4世紀	2.5	
	60	ローマ帝国属州ガリア (ガリア帝国)	コロニア＝アグリッピネンシス [ケルン]	ドイツ	1～4世紀	2.3	
	1	倭 (弥生時代)	比恵・那珂遺跡群	日本	前1～後1世紀	1.4	
	51	ローマ帝国	オスティア & ミセヌム [オスティア＝アンティーカ]	イタリア	前1～後4世紀	1.3	
	66	ローマ帝国	メディオラーヌム [ミラノ]	イタリア	～後4世紀	1.2	
	76	ローマ帝国 (バルミユラ王国)	バルミユラ	シリア	前1～後3世紀	1.2	
	75	ローマ帝国＝属州シリア	ダマスカス	シリア	2～8世紀	1.1	
	5	倭 (弥生～古墳初期)	纏向遺跡	日本	3世紀	0.9	
	48	クシャーナ朝	シルカップ (タキシラ第3都市)	パキスタン	前1～後2世紀	0.7	
	58	ローマ帝国属州アフリカ	レプティス＝マグナ (トリポリタニア) (トリポリ)	リビア	～5世紀	0.7	
	52	ローマ帝国	ボンベイ	イタリア	1世紀	0.6	
極小規模都市	3	倭 (弥生時代)	吉野ヶ里遺跡	日本	2～3世紀	0.4	
	2	倭 (弥生時代)	唐古＝鍵遺跡	日本	2～3世紀	0.3	
	59	ローマ帝国属州アフリカ	ティムガッド (タムガス, タムガディ)	アルジェリア	2～6世紀	0.3	
	83	ローマ帝国属州エジプト	アコリス	エジプト	～5世紀	0.2	
	4	倭 (弥生時代)	池上＝曽根遺跡	日本	前1～後2世紀	0.1	
	第Ⅱ期 (4～6世紀)						
	巨大都市	23	北朝 (東魏・北周)	鄴城 (鄴南城・鄴北城)	中国	6世紀	67.3
21		北魏	洛陽 (漢魏洛陽城)	中国	4～6世紀	62.1	
19		北朝 (西魏・北周)	長安 (漢長安城)	中国	6世紀	33.2	
91		メソアメリカ古典期	テオティワカン	メキシコ	2～6世紀	31.9	
大規模都市	46	マウリア朝インド	バーナリプトラ [ビハール州パトナ]	インド	4～6世紀	23.2	
	56	ローマ帝国	コンスタンティノポリス (拡張) [イスタンブル]	トルコ	5～15世紀	14.6	
	50	ローマ帝国	ローマ	イタリア	1～4世紀	14.4	
	80	ローマ帝国属州エジプト	アレクサンドリア	エジプト	前4～後7世紀	10.1	
中規模都市	29	南朝 (呉～陳)	建康 [南京]	中国	3～6世紀	8.4	
	56	ローマ帝国	コンスタンティノポリス (当初) [イスタンブル]	トルコ	4世紀	7.4	
	57	ローマ帝国属州アフリカ	カルタゴ	チュニジア	前1～後6世紀	7.2	
	78	ローマ帝国属州シリア	アンティオキア [アンテキア]	トルコ	1～6世紀	6.0	
小規模都市	37	魏氏朝高昌国	高昌城	中国	5～7世紀	4.0	
	24	北魏	盛楽城	中国	4世紀	2.7	
	88	ササン朝ペルシア	アルダシール＝フルラ [フィルザバード]	イラン	3～7世紀	2.7	
	93	メソアメリカ マヤ古典期	カミナルフユ [グアテマラ＝シティ]	グアテマラ	3～10世紀	2.7	
	39	扶南国	アンコール・ボレイ	カンボジア	6～7世紀	2.5	
	60	ローマ帝国属州ガリア (ガリア帝国)	コロニア＝アグリッピネンシス [ケルン]	ドイツ	1～4世紀	2.3	
	100	アンデス＝ナスカ文化	カワチ	ペルー	～5世紀	1.8	
	33	吐谷渾	伏俟城	中国	4～7世紀	1.5	
	42	林邑	チャーキユウ	ヴェトナム	4～6世紀	1.5	
	97	メソアメリカ＝マヤ古典期	パレンケ	メキシコ	6世紀	1.4	
	51	ローマ帝国	オスティア & ミセヌム [オスティア＝アンティーカ]	イタリア	前1～後4世紀	1.3	
	53	ローマ帝国西方領土	ラヴェンナ	イタリア	4～5世紀	1.3	
	66	ローマ帝国	メディオラーヌム [ミラノ]	イタリア	～後4世紀	1.2	
	75	ローマ帝国属州シリア	ダマスカス	シリア	2～8世紀	1.1	
	77	ローマ帝国属州シリア	ボスラ	シリア	2～7世紀	1.1	
	極小規模都市	67	ローマ帝国属州ブリタニア	ウエルラミウム	イギリス	4世紀	0.9
34		夏 (五胡十六国)	統万城	中国	5世紀	0.8	
35		車師前国	交河城	中国	前1～後5世紀	0.4	
83		ローマ帝国属州エジプト	アコリス	エジプト	～5世紀	0.2	
36		鄯善王国	楼蘭 (クロライナ)	中国	～5世紀	0.1	
第Ⅲ期 (7～9世紀)							
巨大都市	20	唐	長安 [西安]	中国	6～9世紀	75.6	
	22	唐	洛陽 (隋唐洛陽)	中国	6～9世紀	43.5	
	79	アッバース朝	バグダード	イラク	8～9世紀	32.3	
大規模都市	7	日本 (飛鳥時代)	新益京 (藤原京)	日本	7～8世紀	20.8	
	54	第1次ブルガリア帝国	プリスカ [シュメン州]	ブルガリア	7～9世紀	20.3	
	8	日本 (奈良時代)	平城京 [奈良]	日本	8世紀	20.1	
	9	日本 (平安時代)	平安京 [京都]	日本	8～9世紀	18.8	

面積 ランク	番号	国家・文明	都市名 (〔 〕内は現代地名)	現代の国家	概略の時期	面積 (km ²)
大規模都市 (承前)	30	唐	揚州	中国	6～8世紀	17.0
	95	メソアメリカ=マヤ古典期	ティカル	グアテマラ	4～10世紀	15.6
	15	渤海	上京龍泉府	中国	8～10世紀	14.7
	56	中世ローマ帝国(東ローマ帝国)	コンスタンティノポリス〔イスタンブル〕	トルコ	4～15世紀	14.6
	44	ビイ族スリ=クシェトラ王国	スリ=クシェトラ	ミャンマー	5～7世紀	14.2
	108	日本(平安時代)	長岡京	日本	8世紀	12.2
	96	メソアメリカ マヤ古典期	セイバル	グアテマラ	9～10世紀	11.8
	18	高句麗	長安城(平壤城)〔平壤〕	北朝鮮	6～7世紀	10.4
80	中世ローマ帝国エジプト属州	アレクサンドリア	エジプト	前4～後7世紀	10.1	
中規模都市	40	真臘国	イシャーナブラ〔サンボーン=プレイ=クック〕	カンボジア	7世紀	6.3
	17	百濟	泗泚〔扶餘〕	韓国	6～7世紀	5.5
	16	新羅	慶州	韓国	7世紀	5.2
小規模都市	81	ウマイヤ朝、アッバース朝	アル=フスタート〔カイロ〕	エジプト	7～11世紀	4.2
	10	日本(奈良・平安時代)	大宰府	日本	8～10世紀	2.6
	89	ソグド人国	アフラシヤブ〔サマルカンド〕	ウズベキスタン	8～9世紀	2.0
	11	日本(奈良・平安時代)	多賀城	日本	8～10世紀	1.9
	6	日本(飛鳥時代)	倭京(飛鳥)〔明日香〕	日本	7世紀	1.5
	99	アンデス中期ホライズン「ワリ帝国」	ワリ	ペルー	6～10世紀	1.5
	68	イングランド	ロンドン	イギリス	9～10世紀	1.3
	92	メソアメリカ古典期後期	テオテナンゴ	メキシコ	6～11世紀	1.3
75	正統カリフ、ウマイヤ朝	ダマスカス	シリア	2～8世紀	1.1	
極小規模都市	38	吐蕃	ラサ	中国(チベット)	7～9世紀	0.8
	74	アッバース朝、ファティマ朝	イェルサレム	イスラエル/パレスティナ	7～11世紀	0.8
	63	カロリング朝フランク王国	アーヘン	ドイツ	9～12世紀	0.5
	101	アンデス中期ホライズン「ワリ帝国」	ピキリヤクタ	ペルー	6～10世紀	0.5
	65	トスカーナ辺境伯領	フィレンツェ	イタリア	8～9世紀	0.3

第Ⅳ期(10～12世紀)

大都市	41	クメール朝	アンコール(アンコール=トム & ワット)	カンボジア	11世紀	68.6
	31	南宋	臨安〔杭州〕	中国	12～13世紀	51.4
	25	北宋	開封〔開封〕	中国	10～12世紀	46.5
大規模都市	26	金	中都〔北京〕	中国	12～13世紀	26.6
	9	日本(平安時代)	京都(後期平安京)	日本	11～12世紀	25.2
	82	アッバース朝	アル=フスタート & カーヒラ〔カイロ〕	エジプト	12世紀	24.8
	43	ヴェトナム	タンロン〔ハノイ〕	ヴェトナム	11世紀～	14.9
	56	中世ローマ帝国(東ローマ帝国)	コンスタンティノポリス〔イスタンブル〕	トルコ	4～15世紀	14.6
	28	遼	中京大定府	中国	10～12世紀	14.5
	29	南唐	江寧府〔南京〕	中国	10世紀	14.5
	85	セルジューク朝	メルヴ	トルクメニスタン	11～12世紀	10.8
中規模都市	27	金	上京会寧府	中国	12～13世紀	6.3
	109	メソアメリカ後古典期	トゥーラ〔トゥーラ・ヒココティトラン〕	メキシコ	10～11世紀	5.8
	79	アッバース朝	バクダード	イラク	11～12世紀	5.7
	32	西夏	興慶府〔銀川〕	中国	11～13世紀	5.0
小規模都市	98	アンデス第2ホライズン～後期中間期	シカン(バタン・グランデ)	ペルー	8～14世紀	4.4
	47	チャウハーン朝インド	キラール=ラーイー=ピタウラー〔デリー〕	インド	11～12世紀	3.3
	13	日本(京・鎌倉時代)	鎌倉	日本	12～14世紀	3.2
	14	日本(平安時代後期)	奈良	日本	12世紀～	3.1
	103	ミシシッピー文化	カホキア	アメリカ	12世紀	2.8
	71	ムラービト朝	セビージャ(セベリア)	スペイン	12世紀	2.7
	12	日本(平安時代奥州)	平泉	日本	12世紀	2.6
	80	トゥールーン朝、ファティマ朝	アレクサンドリア	エジプト	9世紀～	2.5
	84	ルーシ	キエフ〔キーウ〕	ウクライナ	12～13世紀	2.5
	55	第1次ブルガリア帝国	プレスラフ	ブルガリア	10世紀	2.4
	105	ファティマ朝、後ウマイヤ朝、ムラービト朝、ムワッヒド朝	フェズ〔フェズ・エル・バリ〕	モロッコ	9世紀～	2.3
	70	カペー朝フランス	パリ	フランス	12～13世紀	2.2
	49	シンハラ王朝	ポロンナルワ	スリランカ	11～13世紀	2.0
	68	イングランド	ロンドン	イギリス	11～12世紀	1.5
	45	バガン朝ビルマ	バガン〔バガン〕	ミャンマー	11～13世紀	1.3
92	メソアメリカ後古典期	テオテナンゴ	メキシコ	6～11世紀	1.3	
87	オスマン帝国	サナア	イエメン	9～16世紀	1.2	
69	イングランド	ヨーク	イギリス	11世紀	1.0	
72	後ウマイヤ朝	コルドバ	スペイン	11世紀	1.0	
極小規模都市	62	神聖ローマ帝国ブラバント公国	ブリュッセル	ベルギー	12～14世紀	0.9
	104	ガーナ王国	クンビ=サレー	モーリタニア	8～11世紀	0.6
	63	神聖ローマ帝国	アーヘン	ドイツ	9～12世紀	0.5
	64	ジェノヴァ共和国	ジェノヴァ	イタリア	12世紀	0.5
	102	アンデス第2ホライズン	ティワナク	ボリビア	7～11世紀	0.5
	106	シャウテレウル王朝	ナンマトル(ナン・マドール)	ミクロネシア連邦	11～15世紀	0.2
	73	ムラービト朝	グラナダ	スペイン	11世紀	0.1
107	ジンバブウェ王国	グレート・ジンバブウェ	ジンバブウェ	10～15世紀	0.1	

A Comparative Study of Ancient Cities in the World

by

Kunikazu Yamada

In order to consider the position of ancient Japanese cities in the world, we will first analyze ancient cities from the 1st to 12th centuries in terms of area. We will broadly divide this period into Period I (1st to 3rd centuries), Period II (4th to 6th centuries), Period III (7th to 9th centuries), and Period IV (10th to 12th centuries), and classify cities into megacities with an area of 30 km² or more, large-sized cities with an area of 10 to 30 km², medium-sized cities with an area of 5 to 10 km², small cities with an area of 1 to 5 km², and very small-sized cities with an area of less than 1 km². Examples of megacities include Chang'an (in the Later Han Dynasty) and Teotihuacan in Periods I and II, Yecheng and Luoyang (in the Northern Dynasty) in Period II, Chang'an, Luoyang (in the Tang Dynasty), and Baghdad of in Period III, and Angkor, Lin'an, and Kaifeng in Period IV. In Japan, for example, Heian-kyô (Kyôto, in Periods III and IV) was a large-sized city.

It is difficult to accurately estimate the populations of ancient cities, but it is estimated that Chang'an (Period III), Angkor (Period IV), Lin'an (Period IV), Kaifeng (Period IV), and Luoyang (Period III) had populations of over 400,000. Below them are cities with populations of 100,000 to 400,000. In the ancient world, cities with populations of over 100,000, we can called "World-class cities". In Japan, Heian-kyô (Kyôto, Period III and IV) falls into this category and can be evaluated as one of the world-class city.

Although the appearance of ancient cities in the Japanese archipelago was certainly late, it underwent rapid development from Period III to Period IV.